

氏名(本籍)	頭 ^ず 川 ^{かわ} 昭 ^{あき} 子 ^こ (富山県)				
学位の種類	博士(体育科学)				
学位記番号	博乙第888号				
学位授与年月日	平成5年3月25日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	体育科学研究科				
学位論文題目	舞踊のイメージ探求のための意味空間構成モデル				
主査	筑波大学教授	教育学博士	松浦	義行	
副査	筑波大学教授	医学博士	古藤	高良	
副査	筑波大学教授	教育学博士	市村	操一	
副査	筑波大学助教授		桑原	隆	
副査	筑波大学教授	教育学博士	海保	博之	
副査	筑波大学教授	保健学博士	池田	由紀江	

論文の要旨

1), 研究の目的, 意義

舞踊は作者のある意図のもとに創作されるが、その意図が作品のどのように表現されているかはその作品を鑑賞する側の作品に対して抱くイメージによって、その一面が測定される。つまり、鑑賞者のイメージはその作品の質を評価する重要な尺度である。そこで、舞踊のイメージの特徴を客観的な方法で測定し、評価するために、意味空間における舞踊のイメージの構成要因を分類することを通して、意味空間構成モデルを構築し、そのモデルを用いて舞踊作品を分析する事を目的とした。

2), 方法

実験1では運動の方向、表現人数、群の体系、2集団の表現の4視点から構成された舞踊表現(31種類)を8mmカラーフィルムに収録し、これを刺激材料として111名の体育を専門とする学生を、実験2では主題の異なる舞踊表現(8種類)を8mmカラーフィルムに収録したものを887名の体育、芸術、医学を専門とする学生を標本として各刺激に対する名詞、形容詞、動詞の連想語を収集した。得られた連想語の出現頻度と連想語相互の関連性を検討して分類し、あわせて尺度構成の観点から対語を構成出来る形容詞、形容動詞で46尺度を構成した。そして、各尺度は5段階尺度でイメージを表すように工夫された。ついで、実際に高く評価された国際創作舞踊コンクールの入賞作品及び日本舞踊とバレエ作品を加えた実験3から実験17までの15回の実験において、舞踊表現の母集団を

代表すると考えられる出来るだけ多くの舞踊表現の標本を用いて、舞踊のイメージを、46尺度を用いて測定し、実験毎に46尺度について因子分析を繰り返し、因子の抽出と解釈を行った。これらの異なる実験において抽出された因子の異なる舞踊表現標本間における類似性の検討から因子の頑健性及び客観性を検討した。解釈された因子の出現頻度、貢献度を考慮して、すべての舞踊表現において共通にイメージを説明するのに有効な因子を選択し、これらを共通の意味次元として、舞踊のイメージ測定の意味次元モデルを構築した。ついで、このモデルの妥協性を実際に発表された舞踊作品に適用し、その特徴を適切に表現出来ている事、及びバレエ作品と日本舞踊作品にも適用し、両作品の特徴が従来の一般的認識と矛盾の無いことを確かめた。

3), 結果

実験1, 2で得られた連想語の出現頻度を資料として、相関行列を求め、因子分析の結果38対の形容詞対が選択された。これに、色調和委員会の提案する8形容詞対を加え46の両極性をもつ形容詞対で、イメージ測定の尺度を構成した。実験3から実験17までの各実験において、あらゆる舞踊表現の適切な標本となるように舞踊表現を工夫して構成された舞踊表現及び作品を材料として、実験が繰り返され、実験毎に46尺度によるイメージの構造が因子分析によって検討された。これら15回の実験にともなう因子分析において抽出され、解釈された因子相互の類似性を検討し、因子の解釈の適切性と因子の頑健性を検討している。これらの検討を土台として、因子の出現頻度が15回の実験において70%以上である事とその貢献度が4.00以上である事を基準として、明快性、審美性、力動性、弾力性、調和性、重量性、難易性、空間性の8因子を舞踊のイメージを測定するための共通な意味次元として同定した。同時に、イメージの8意味次元における値を各意味次元に含まれる尺度の得点の平均値をもって評価する事とし、意味次元評価の簡便性を配慮している。

さらに、これら8意味次元を用いて、標本作品としても用いられた国際創作舞踊コンクールにおいて入賞した作品のイメージを測定し、作者の表現意図を適確にこれらの8意味次元で表され得る事を確かめ、構築した意味次元構成モデルの妥当性を確認した。また、これらの作品が審美性次元のより美的である方向に、難易性次元のより難しい方向にイメージされている事が示され、巧みな構成と高度な舞踊技法で表現された芸術作品の特徴を適切に導き出し得たと考えられた。さらに、標本としても用いられたバレエ作品と日本舞踊の比較にこれら8意味次元を適用し、バレエ作品は日本舞踊作品より、明快性では明快の方向に、審美性では美の方向に、活動性では活動の方向に、重量性では軽量の方向に、空間性では広大の方向に強くイメージされている事を確かめ、8意味次元の妥当性を再び確認している。そして、バレエと日本舞踊の比較から、両舞踊表現の特徴を量的に表現出来る事から、両者の差異をより明確に表す事が出来、精度の高い比較が可能であることを示した。差異を量的に表現出来る事は従来質的な表現でしか示されなかった振付け、指導等における言語表現がよりの確なものとなされ得る可能性を示唆した。

審 査 の 要 旨

舞踊のイメージを測定する事は、従来鑑賞者の主観にゆだねられていた。この点に着目しより客観的にイメージを捉えようとした試みは多くはないが従来より見られた。しかし、共通な意味次元として8次元を、舞踊作品母集団の代表と考えられるように構成した標本作品及び実験に発表された舞踊作品を標本として、それらに対するイメージを測定しつつ、同定した研究は本研究が最初のものである。また、イメージを測定する尺度を舞踊に対する連想語集団から、多少の問題があるが、統計的方法を用いて抽出した事も評価出来る。しかも、意味次元を同定するのに因子分析を繰り返し、それらの結果を因子の類似性、出現頻度等の統計的指標を用いた事意味次元の選択に客観的方法を用いていると云える。この点は本研究結果の一般化の可能性を高めるものである。

また、標本作品に対するイメージの測定には、10年以上の長い期間をかけて17回の実験を繰り返し、その都度因子分析を繰り返して意味次元を同定し、最後に標本作品に共通な意味次元を適切な統計的方法を用いて同定した事の努力と客観性を保持しようとした態度は敬服に値する。しかし、舞踊作品の母集団は過去、現在、未来を含めればまさに無限母集団であり、本研究で標本作品として構築した作品が母集団の適切な標本であるとの保証は、従来の舞踊構成理論の理論的観点からのみしか与えられない。この点は問題とは云いながら現時点では克服出来ない事であり、本研究の価値を低めるものではない。

ここで提案された8意味次元は、これまで発表された多くの舞踊作品や文化として残されている舞踊作品を鑑賞者の側から分類する道具（尺度）として有用なものであると考えられると、同時に舞踊作品創作においては創作的意図によって強調すべき観点が示され得る実践的価値をも有している云える。このように、本研究の発展可能性の大なる事が推測され、本研究は、舞踊の理論的研究及び舞踊創作の実践にも偉大な貢献をするものといえよう。さらに、かかる研究方法は他の運動学領域の研究にも適用可能であり、運動学研究にも意義ある示唆を与えるものと考えられる。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。